

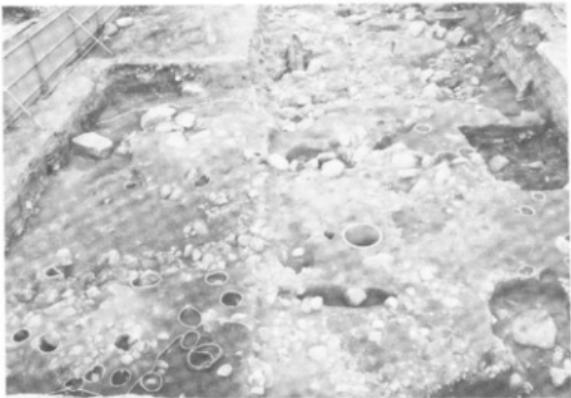
fig. 146 第1次調査
地蔵元地区全景
(東から)



fig. 147 第1次調査
土塊 I
(東から)



fig. 148 第2次調査
城の前地区全景
(南から)



によって切られている。幅1.5m～2m、深さ0.1m～0.25mを測る。埋土より、瓦器片、土師器片、須恵器片が出土した。

河道6 調査地南西隅を北西から南東方向に流れる自然流路である。河道1の下層で検出された。幅3m～5.5m、深さ0.15m～0.25mを測る。埋土より、土師質小皿、弥生土器、瓦器片、須恵器片が出土した。

河道7 調査地南西隅で南北方向に流れる自然流路である。東側の肩のみ検出しており、幅は現存長で0.4m、深さ0.1m～0.2mを測る。

河道8 調査地中央北端で検出した北西から南東方向に流れる自然流路である。南側を河道2によって切られている。幅2.5m、深さ0.1mを測る。

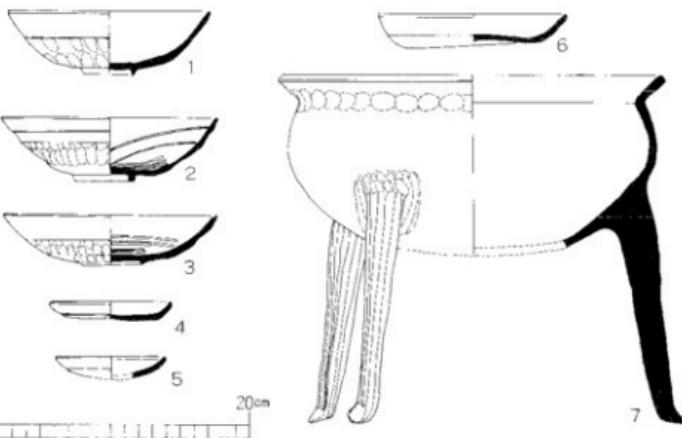


fig. 149 土壌1出土遺物

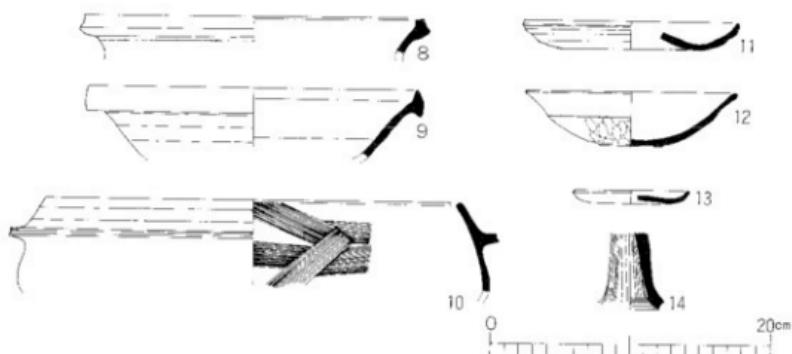


fig. 150 淡茶色砂質土層出土遺物

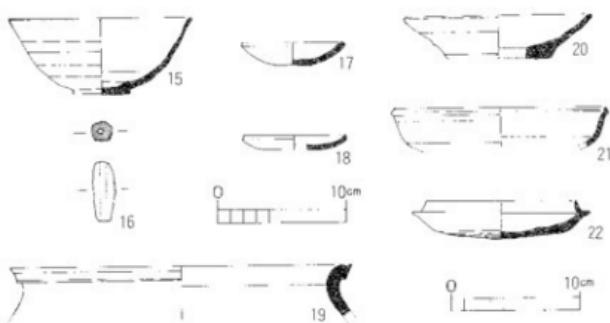


fig. 151 暗褐色粘性砂質土層出土遺物 (15~19) 表採 (20~22)

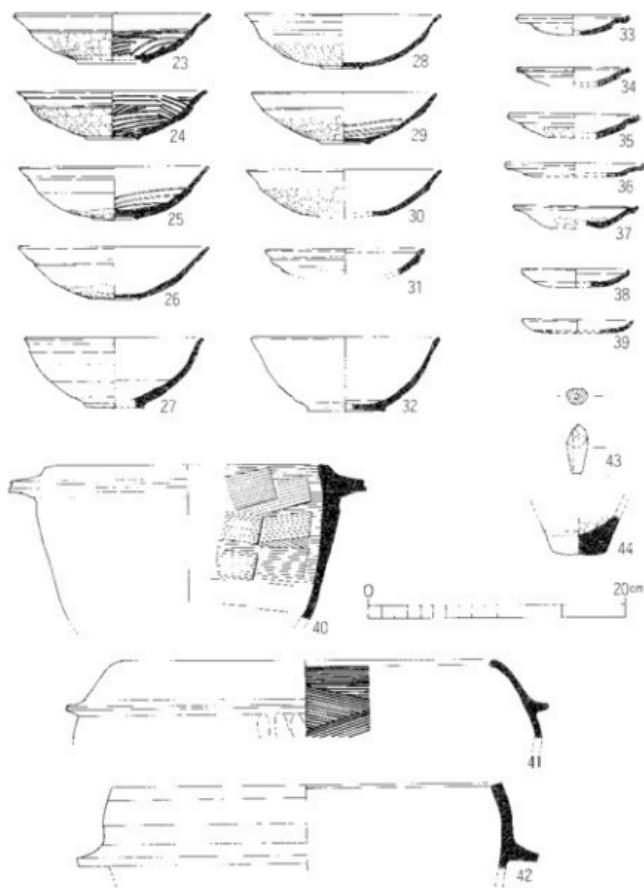


fig. 152 河川状造構出土遺物

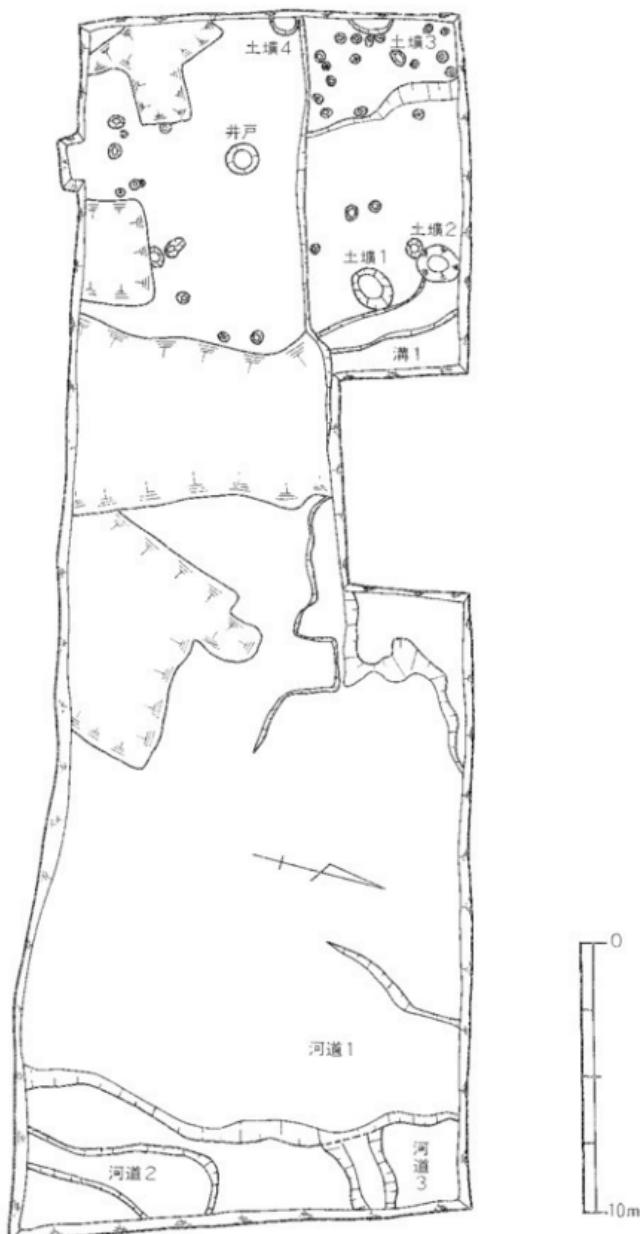


fig. 153 第2次調査遺構平面図

第2次調査

調査地は、天神川をはさんで、第1次調査地区のすぐ西側に位置する。土層の基本層序は、北側で、地表下0.3mまでが表土で、地表下0.5mまでが旧耕土・床土である。

その下層には、古墳時代の土師器、須恵器を含む黄褐色粘質土層、弥生土器、古墳時代の須恵器を含む淡茶褐色砂質土、弥生土器を主として包含する暗褐色粘性砂質土となり、地山は茶褐色砂礫土である。

検出した遺構は、調査地西側では、土壙4基、溝1条、ピット33か所である。調査地東側では、河川状遺構3か所である。また調査地北西隅において、南北5.5m、東西5mの範囲にこぶし大の礫が集中して検出された。

検出遺構

- 土壙1** 調査地北西部で検出した楕円形の土壙である。長径1.4m、短径1m、深さ0.2mを測る。
- 土壙2** 土壙1の北西1mで検出した楕円形の土壙である。長径1.3m、短径1.1m、深さ0.15mを測る。埋土より、弥生土器片が出土した。
- 土壙3** 調査地西端で検出した楕円形の土壙である。現存長では長径0.9m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土より、弥生土器が出土した。
- 土壙4** 調査地北西隅で検出した楕円形の土壙である。現存長では、長径1.6m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。
- 溝1** 調査地北西部で検出した北西から南東方向に流れる溝である。幅1.2m～1.9m、深さ0.1m～0.2mを測る。
- ピット1～33** 調査地西側において、茶褐色砂礫土上面で検出したピット群である。特に、調査地北西隅及び南西端に集中している。埋土はいずれも暗褐色粘性砂質土である。
- 河道1** 調査地東側で検出した南北方向に流れる自然流路である。幅4m～8m、深さ0.2m～0.5mを測る。埋土より、弥生土器、土師器片、須恵器片、埴輪片が出土した。
- 河道2** 調査地南東部で検出した南北方向に流れる自然流路である。幅1.5m～3.5m、深さ0.1m～0.25mを測る。埋土より、弥生土器、土師器片、須恵器片が出土した。
- 河道3** 調査地北東部で検出した東西方向に流れる自然流路である。幅1.5m～2m、深さ0.2m～0.25mを測る。河道1によって切られている。埋土より、土師器片が出土した。
- 3.まとめ** 郡家遺跡は古代菟原郡衙の所在地と推定されているが、今回の調査では、これに該当する時期の遺構・遺物は検出されなかった。ただし、天神川より東側の地蔵元地区では、鎌倉時代の瓦器、土師器が出土し、西側の城の前地区では、弥生時代後期から古墳時代の土器が出土した。

てんじんがわ
14. 天神川遺跡

1. はじめに 昭和57年10月、天神川河川改修工事中の立会で多量の弥生土器を発見し、緊急発掘調査を実施した。

本調査の結果、河川状遺構と溝を検出し、弥生時代後期末葉の土器が多量に出土した。今回の調査地は、昭和57年度に調査を実施した地点から、南へ50mのところである。調査面積は430m²（南北36m、東西7.5~13m）であった。

2. 調査概要 調査地の北端部分は、前年度工事によって搅乱されていた。また、トレーナー南端から11.5m北で1段落ち込み、若干の遺物包含層の流土を残していたが、黄褐色砂質土の地山がみられた。トレーナー西部中央は、下水道管付設の掘削によって搅乱されていた。

検出遺構 段落ちから北端部にかけては黄褐色粘性砂質土が遺構面で木棺墓2基、溝1条を検出した。トレーナー南部では削平面で自然流路2条と上塙1基を検出した。

自然流路1 トレーナー東端沿いに、やや蛇行しながら南北に流れる幅2m~3m、深さ0.1m~0.2mの浅い流路である。自然流路2を切っている。

自然流路2 トレーナー西端から南東へ流れる幅7m以上、深さ0.3m前後の浅い流路である。堆積土の上層に黒灰色砂泥の遺物包含層の流れ堆積があり、この地層から弥生土器が出土した。

土 塗 自然流路2の河底で検出した。南北1.5m、東西1.2m、深さ0.2mの楕円形の土塗である。埋土は、炭を含む暗灰色砂質土で遺物の出土はない。



fig. 154 天神川遺跡位置図

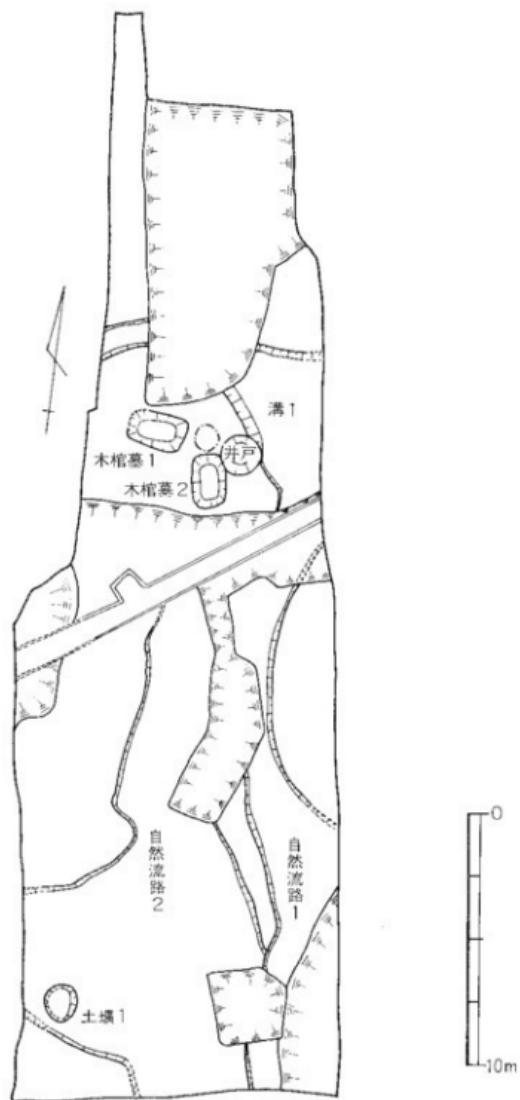


fig. 155 天神川流域調査区平面図

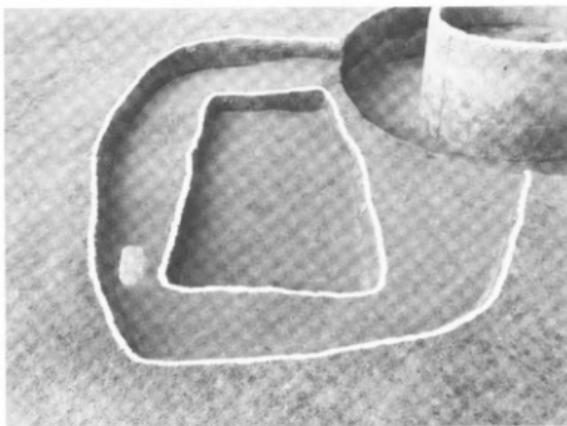
fig. 156 木棺墓検出状況
(東から)



fig. 157 土器群(手前)と
木棺墓 1
(東から)



fig. 158 木棺墓 2
(南から)



溝

北側は前年度工事の掘削によって失われている。南側は、後世の開墾による段落ちで削平されたものと思われる。そのため現存長9mを検出しているにすぎない。幅約1.7m～2m、深さ0.4mのV字溝である。埋土は黒灰色砂泥が西側から流れ込んでおり、弥生土器片が出土した。



fig. 159 土壌 1

土器群

溝の西側1mに弥生土器が径0.8mにわたって集中して水平に堆積していた。土器の器形は磨減が激しく、不明な物が多い。変形土器が主体であると考えられる。土器群上辺の標高は、25.20mを測る。

木棺墓1

溝に対して直交し、東西に主軸を置く木棺直葬墓である。墓壙掘形は、西側を工事用杭掘形によって欠くが、規模は長軸長2.3m、幅1.4m、深さ約0.2mを測る。棺痕跡も西辺の一部を工事用杭掘形によって欠くが、墓壙掘形のやや東に偏して検出した。棺の主軸長1.4m、小口幅0.9m、深さ0.15mを測る。棺中央から東にかけて、棺上面に河原石の集石がみられる。集石は中央に幅0.16m、高さ0.15m前後の三角錐状の石材を立て、周囲に0.1m大の河原石を順次2段に積んでいる。集石上面の標高は、25.20mを測る。棺底はほぼ水平で、棺材等の痕跡は確認できなかった。遺物の出土はない。

木棺墓2

木棺墓1の主軸に対して直交し、南北に主軸を置く木棺直葬墓である。墓壙掘形東北辺は近代の井戸掘形によって欠いている。

掘形の規模は、主軸長2.05m、幅1.4m、深さ0.19mを測る。棺痕跡は主軸長1.35m、南側の小口幅は0.65m、北側で0.50m、深さ0.1mを測る。

棺内中央南よりに0.3m大の河原石が棺底より0.21mの高さに立てて置かれていた。石上面の標高は25.04mを測る。棺底はほぼ水平である。遺物は、棺上面及び中央立石上面から弥生土器が出土している。

3.まとめ

今回の調査は、天神川の流路に流れながらも、木棺直葬墓2基と、それに伴うと考えられる溝1条を確認した。これらは方形周溝墓の一部と考えられる。昭和57年10月と昭和59年2月に実施した調査で発見された円形周溝墓・方形周溝墓とほぼ同一時期の弥生時代後期末のものと考えられる。

これらの調査成果によって、天神川の東側の扇状地一帯は、弥生時代後期に墓地として使用されたものと考えられる。

たなかもとしみず
15. 田中元清水遺跡

1. 調査経過 本遺跡は、神戸市東灘区田中町1丁目12番地の1・2（小字元清水）に所在している。周辺に遺跡が多いことから小字名をもって遺跡名とした。遺跡地は国鉄本山駅の南100mにあり、金鳥山(338m)の山麓を南流する八幡谷川と保久良山の東麓を南流する権現谷が形成した等高線10m前後の扇状地に位置している。今回の調査は、大京観光株式会社がライオンズマンション第5本山を建設するに先立って実施したものである。調査面積は約300m²である。
2. 調査概要 遺跡地の土層は、第1層黄色砂質土（宅地造成時の盛土）、第2層黒色土（水田耕作土厚さ約0.3m）、第3層暗褐色粘土（水田床土厚さ約0.15m）、第4層黒褐色粘質土（水田床土厚さ約0.25m）、第5層砂質土（河川流土厚さ約0.05m）、第6層黒色有機質土（河川堆積土厚さ約0.7m）、第7層黒色有機土（堆積沈殿土厚さ0.3m）の7層に区分された。

調査は、第4層以下について層序別に発掘した。第4層中には、須恵器片（5世紀後半）、土師器片が含まれていたが、瓦器片が出上したことから11～12世紀頃形成された水田の床土と見られる。第5層下部には、砂礫の堆積が多く、北から南にS字状に蛇行した状況が検出され、この砂礫に混じって著しく磨耗した弥生式土器片が検出された。この層から出土した土器は、第III～IV様式の土器である。第6層は、粘土と細砂が混合したもので、土中から葦の腐敗したもの等が検出されたことから沼地のような状況であったと考えられた。出土遺物の大部分は第6層であり、縄文晩期、第I様式いずれも10数点以外は、第II様式の上器であった。第7層は礫・遺物等を一切含んでいない。

fig. 160 調査区
平面図

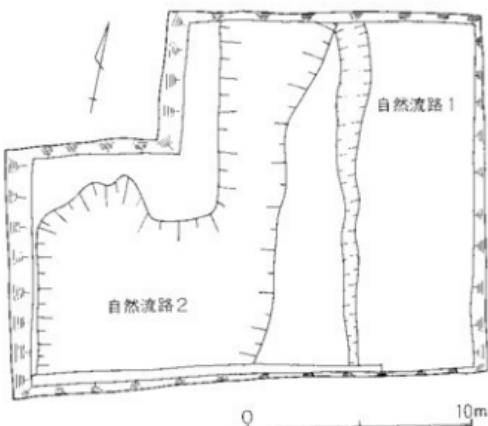




fig. 161 自然流路 2 (北から)

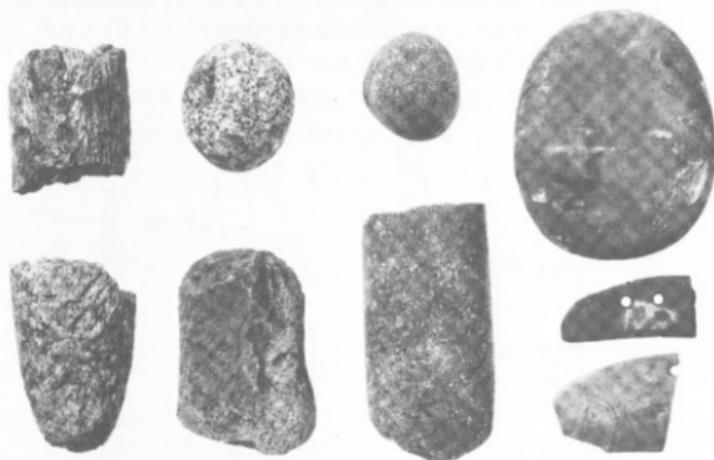


fig. 162 出土石器

第6層は、自然流路と見られる河川の堆積土である。この自然流路と見られる溝状遺構は2本あり、1本（自然流路1）は、調査区域東側で検出された幅3m、深さ0.5mの断面U字状を呈するもので、調査区域北方から南流する。この溝状遺構からは、繩縄・砂のみで遺物は検出されなかった。もう1本（自然流路2）は、この溝状遺構が堆積土で埋まつた後に形成されたもので、南西方向に流れている幅4～5m、深さ0.8mの小川であった（fig. 161）。

3. 小 結 本遺跡の出土遺物は、上記のように付近の洪積台地上にあったと見られる集落から河川に流れこんだものであり、その点で史料的価値は大幅に制限される。出土遺物のうち石器は、石臼12点、石鋸4点、石斧1点、石棒1点が主たるものである（fig. 162）。これらの石器の材質は、石臼1点と石棒が和歌山県紀ノ川産の結晶片岩であり、他の石器類は分析の結果、坂出市金山産80%、二上山産20%という判定が得られた。また土器は、第II様式が中心であり、縄文晩期、第I様式土器片がそれぞれ数10点含まれている。これらの土器のうちにも河内からの搬入品が見られる（fig. 163）。こうした遺物の動きから各地との交流が活発におこなわれていた状況を知ることができ、そこに本遺跡の性格の一端をうかがうことができるよう思う。

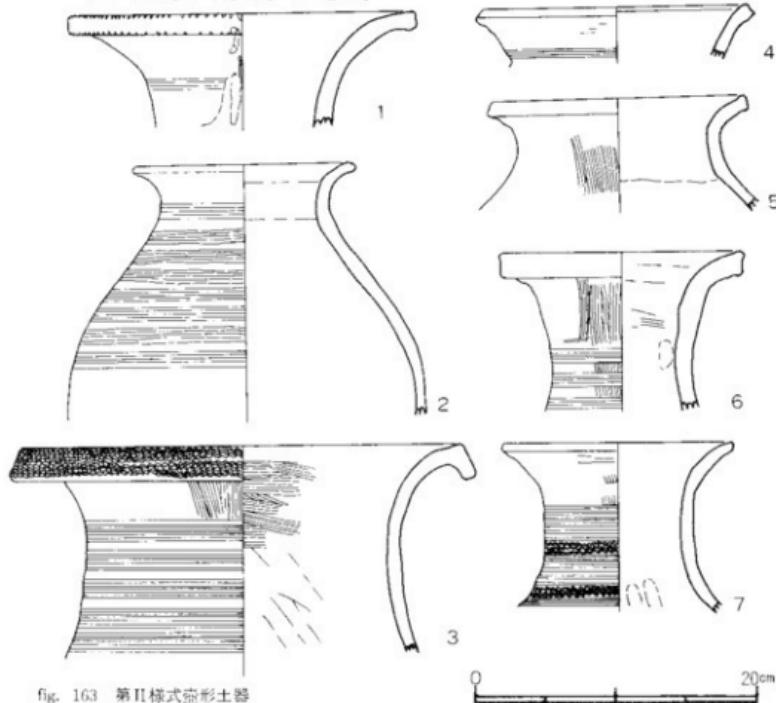


fig. 163 第II様式壺形土器

やまだしゅうがっこうたい
16. 山田小学校内遺跡

1. はじめに 山田小学校内遺跡は、六甲山系の水を集めて西へ流れ加古川に合流する山田川の南河岸段丘上に立地する。

歴史的環境 川の北側には、淡河との境をなす帝釈連山がそびえ、その山麓には、平安時代中期、後期の仏像を持つ無動寺と、もと無動寺の鎮守社である室町時代前期の若王子神社がある。調査地の対岸には、室町時代後期の六条八幡神社三重塔を望むことができる。また川下には、日本最古の民家である箱木千年家（室町時代）が残存している。

今回、山田小学校の校舎建て替えに伴い、試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が発見されたため、発掘調査を実施した。

2. 調査方法 包含層である灰褐色砂質土上面まで機械で掘削し、あとは人力によって調査した。調査途中で、給食車進入路（第1拡張部）、排水路（第2拡張部）が追加されたため、調査範囲を拡張した。

3. 基本層序 土層の基本層序は、第I層（盛土）、第II層（旧耕土）、第III層（灰褐色砂質土上層、下層）、第IV層（暗灰褐色小疊層）、第V層（暗灰色小疊層）となっている。第III層は奈良時代から近世の遺物を包含する層で、第IV、V層は弥生時代から中世の遺物を包含する層である。

土層は東西方向には、ほぼ水平に堆積している。南北方向では、第2拡張部で第III層と第IV層の間に暗灰色砂質土が入っている。また調査区南半では、層位

fig. 164 調査地全景
(西から)



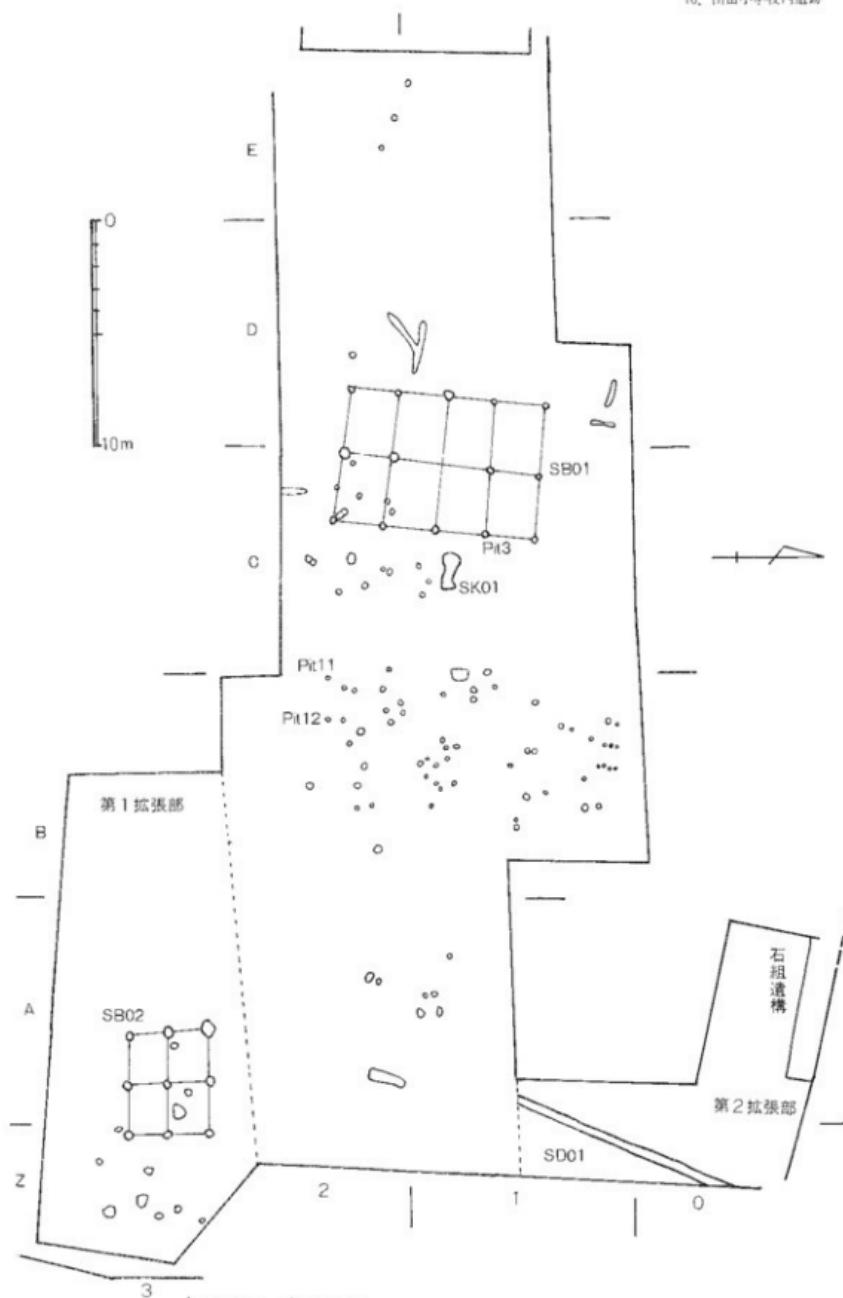


fig. 165 遺構全体図

が高くなり、第V層上に黄褐色粘質土が堆積している。

4. 遺構 第III層（灰褐色砂質土）下層上面

調査区西半（C-1区）で直径約0.15mのピットが0.5m間隔で東西方向に8個並んで検出された。遺構の性格は不明である。

第IV層（暗灰褐色小礫層）上面

掘立柱建物2棟、溝1条、焼土壙1か所、石組遺構1か所を検出した。

掘立柱建物 掘立柱建物1（SB01）は、調査区西半で検出した4間×2間（8.7m×6m）の南北方向の建物である。

掘立柱建物2（SB02）は、第1拡張部東端で検出した2間×2間（5.4m×6m）の東西方向の建物である。

柱穴は多数検出されたが、建物として復元できるのは2棟だけであった。またこれらの柱穴の中に石が入っているもの多かった。

SB01の柱穴3（pit3）では石を除いたところ、多量の炭、鉄製品、石鍋片、完形の須恵器皿が出土した。B-2区柱穴11（pit11）から白磁碗、柱穴12（pit12）からは、須恵器塊を石の上へおおいがぶせたものなどがみつかっている。

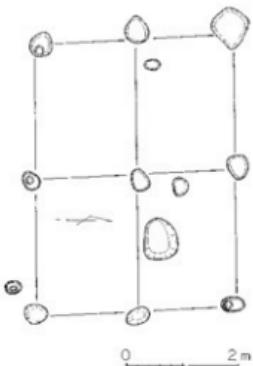


fig. 166 SB02平面図

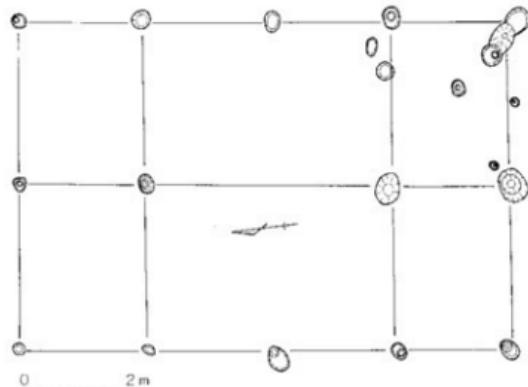


fig. 167 SB01平面図

溝 溝1（S D01）は、第2拡張部で検出した幅0.6m、深さ約0.15mの溝で、東西から北東に流れていたと考えられる。

焼土壙 焼土壙（S K01）は、S B01の東側で検出された長さ3.64m、最大幅2mの不定形土壙である。礫が多く混入し鉄滓が出土した。その周辺からは、完形の須恵器壺・土師器皿が多く、他に白磁碗・鐵製紡錘車・砾石が出土した。また、第2拡張部北壁ぎわで石組造構が検出された。深さ約0.4m、検出長は約6.4m、幅は調査区の外に続いているため不明である。人頭大の石を2段に積み、東へ行くに従って浅くなり消える。底には粘土が貼られていた。溝中には砂が堆積し、中から須恵器・土師器・近世陶器が出土した。

5. 出土遺物 遺物は土器の小片が多く、コンテナに26箱出土した。第III層（灰褐色砂質土）の出土遺物は、東播系須恵器（壺・片口鉢）・土師器・青磁（碗・盤）・白磁碗・瀬戸・備前焼鉢・天日茶壺・近世陶器・釘である。出土遺物の時期は、奈良時代の須恵器壺もあるが、12世紀から14世紀のものが中心である。須恵器壺や片口鉢が多く、土師器皿や瓦器壺は少ない。第IV層（暗灰褐色小礫層）の遺物は縄文時代から近世まで各時代のものが存在するが、中でも奈良時代の須恵器壺が目立っている。中世の遺物には須恵器（壺・片口鉢・小皿・壺）・土師器（鍋・羽釜・皿・蓋）・青磁碗・白磁（碗・皿・壺）・青白磁合子・瓦器壺・瓦などがある。古墳時代の遺物には須恵器（壺・高壺）・土師器高壺・土鍤がある。

その他、弥生土器・石鍤（縄文など）・サヌカイトチップ・近世陶器や時期不明の鐵製紡錘車・釘・鉄滓・青銅片などがある。

第IV層の上面にある遺構からは須恵器・土師器・白磁が出土している。

第2拡張部の暗灰色砂質土層からは、須恵器・土師器が出土し、黄褐色粘質土層からは、須恵器・土師器・備前焼、第V層（暗灰色小礫層）からは、須恵器・土師器・瓦器・備前焼・近世陶器・砾石・土鍤・弥生土器が出土している。

6. まとめ 淡河城周辺の圃場整備事業に先づ調査以外は余り調査の進んでいなかった淡河・山田地区で、中世の建物が発見された意味は大きい。縄文時代のものと思われる石鍤や弥生土器が見つかったことから、おそらく縄文時代までさかのぼって、この地で人々が生活していたことが推定される。焼土壙から鉄滓・鐵製紡錘車・砾石が出土しており、遺物包含層に釘が多く含まれていることからこの遺跡内で製鉄が行われていたと考えられる。

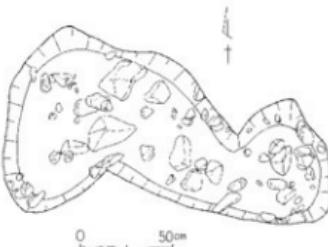


fig. 168 燃土壙実測図

fig. 169 S B 01 (西から)

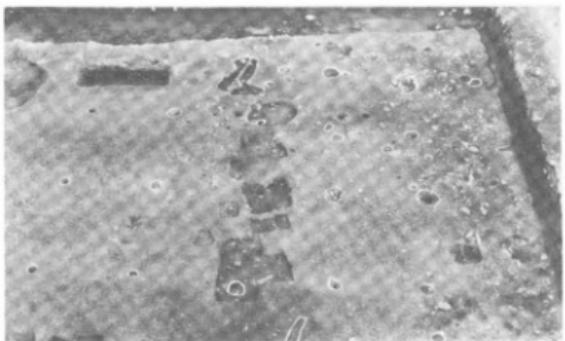


fig. 170 S B 02 (北から)

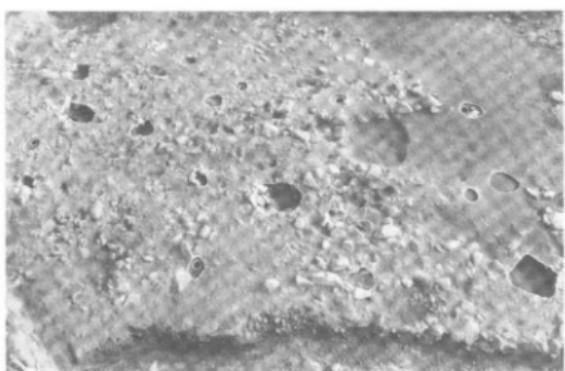


fig. 171 焼土壌 (西から)



17. 北神ニュータウン内遺跡

北神第47地点遺跡

1. 調査経過 昭和57年度、第47地点の調査で57基の火葬墓を検出した。今回これと同一丘陵上で、西接する地域に工事用道路の敷設が計画されたため、影響を及ぼす範囲約870m²について発掘調査を実施した。

2. 立地 遺跡は西方の抜谷に開口する小谷の最奥部と北方支丘の南西斜面部に位置している。ここより有野川が形成した東方の沖積地は望むことはできない。

3. 調査概要 今回の調査区(fig. 172 破線より西)からは計19基の火葬墓を検出した。遺構は大きく東西2群にわけられる。西群(S T64、S T69~S T73)は地山に遺構を構築するが、東群(S T60~S T63、S T65~S T68、S T74~S T78)は流土を遺構面とするものが多く、一部ではその直下からも遺構が検出された。これより東群の遺構検出面を上層遺構面(fig. 172)、東群の下層遺構面及び西群の遺構検出面を下層遺構面(fig. 173)と呼ぶ。

検出遺構

火葬墓 詳細は別表にゆずるが、平面形に関しては、全長約1m、幅約0.8mのほぼ整った長方形を呈するものと、長楕円形または不整円形のものの2種に大別できる。

S T76 は前者のタイプに属するもので、壇底に計6個の棺白石を置いている。壇底より0.1~0.15mまでは炭、灰層があり、人骨も同層中より出土した。土壤北隅には、切先を下に向けて壇内に流入した状態で小刀1が、北西の肩部には同様の状態で土師器1が出土した。壇内西南に頭蓋骨片と思われるものがあるが、小片のため頭位は確定できない。

S T74 は伸展用と考えられ、頭蓋骨は中央やや西で壇底より若干浮いた状態で出土した。

S T77 は不整円形を呈するもので、壇底北東隅に川原石か1個置かれている。石の用途については明らかではないが、骨片はこれの上にあり、上方より内部に落ち込んだものとは考えられない。S T71も壇底南端に1石据え置かれていた。前記のように東群では流土を遺構面として3~5基の火葬墓を小範囲に前後3回にわたって営んだ箇所がある(S T60~S T62、S T66~S T68、S T74~S T78)。これらの時期的関係は古い方からS T74~S T78→S T66~S T68→S T60~S T62となる。平面形のタイプでは長方形を呈すS T76が古い段階の形態と考えられる。

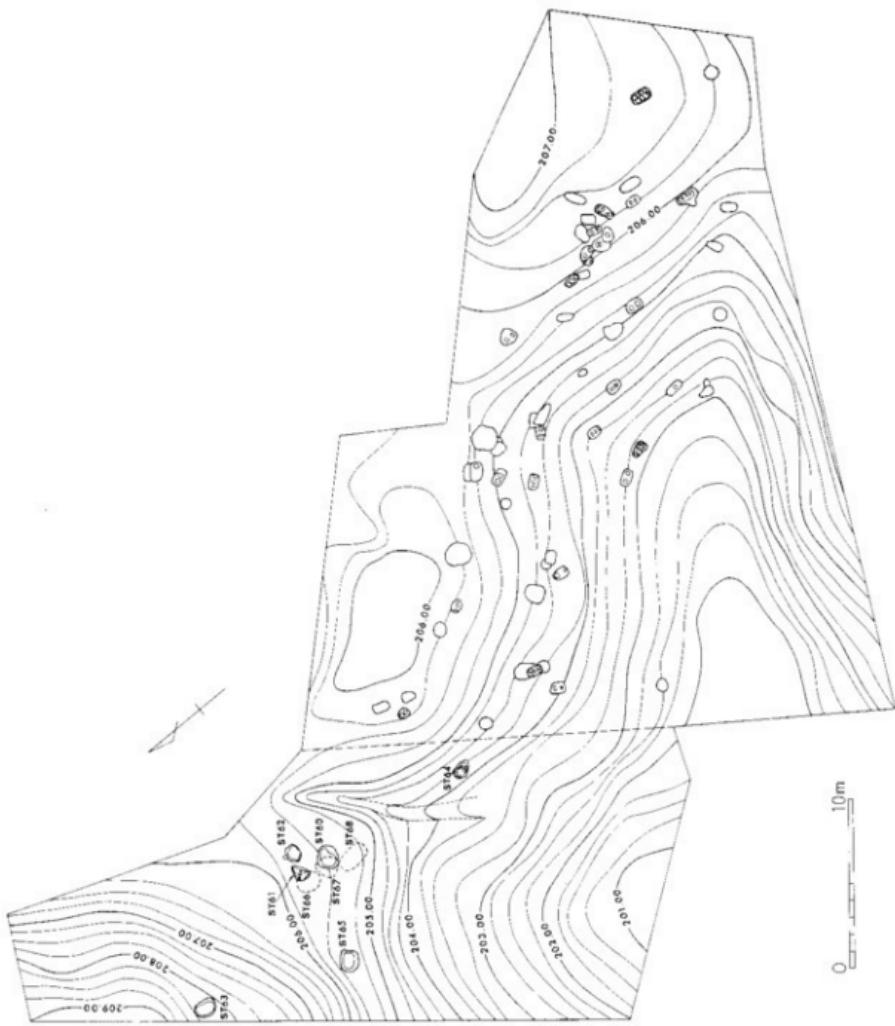


fig. 172 北神第47地点58年度調査上層遺構図

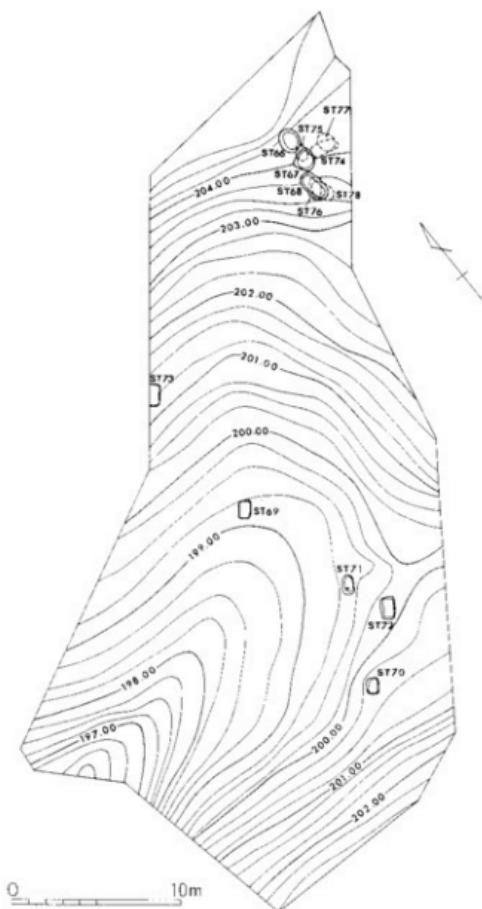


fig. 173 下層遺構図

火葬墓一覧表 (単位はm)

番号	規模			棺台石	出土遺物			その他
	南北	東西	深さ		鉄釘	銭貨	土師器	
60	1.2	1.37	0.32		26		1	
61	0.88	0.9	0.31		8		2	
62	0.84	0.96	0.44		7	3		
63	1.19	1.03	0.32			6	6	
64	1.05	0.8	0.35	3	1			陶器片
65	1.03	1.16	0.32					
66	1.5	1.34	0.46		10	1	3	
67	1.38	1.2	0.5		1			
68	1.88	1.07	0.42				3	
69	1.15	0.87	0.18					
70	1.02	0.76	0.25		24			
71	1.2	0.7	0.19					川原石1
72	1.22	0.8	0.2					
73	1.3	0.8以上	0.3					
74	0.63	1.66	0.25					
75	0.96	0.81	0.42					
76	1.28	0.78	0.5	6			1	小刀1
77	1.17	1.05	0.35					川原石1
78	1.1以上	0.9	0.21					

fig. 174 北神
第47地点
遺跡全景



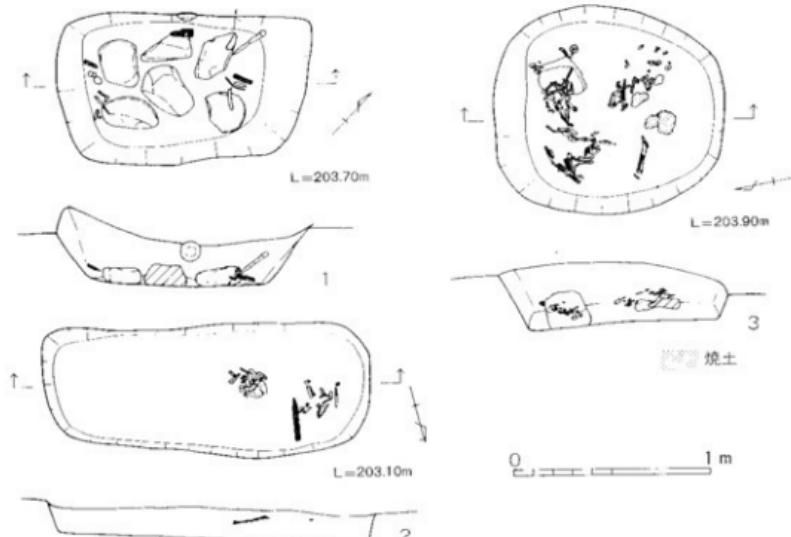


fig. 175 火葬墓実測図 (1:ST76, 2:ST74, 3:ST77.)

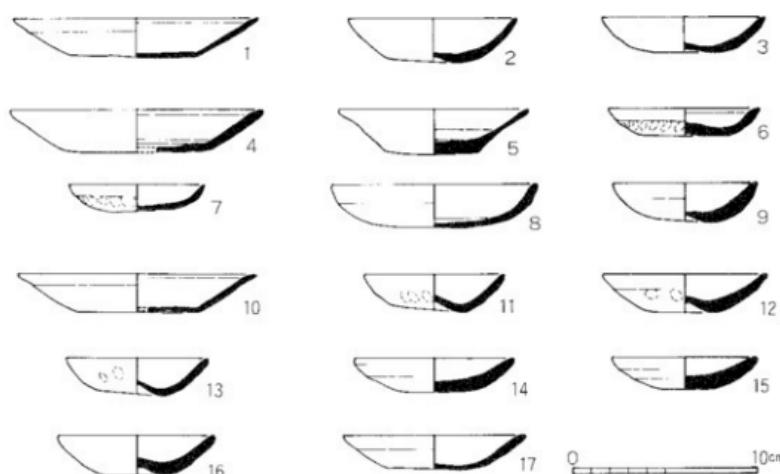
fig. 176 出土上器実測図 (1～3. 流土 4～6. S T63 7. S T60 8, 9. S T61 10. S T60～S T62
11～13. S T66 14, 15. S T68 16. S T66～S T68 17. S T76)



fig. 177 S T 61, S T 62

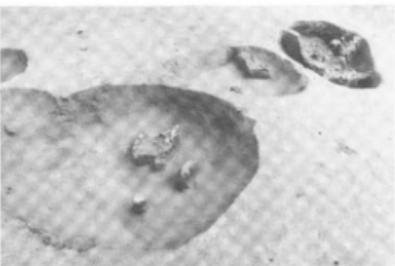


fig. 178 S T 66~S T 68



fig. 179 S T 64



fig. 180 S T 65



fig. 181 S T 66

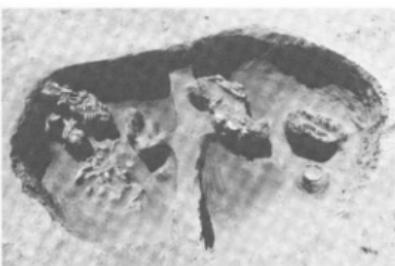


fig. 182 S T 68

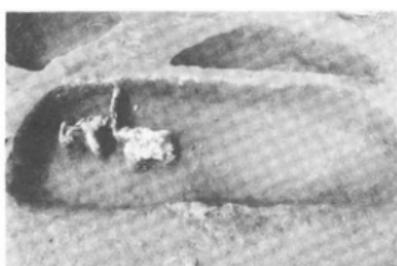


fig. 183 S T 75, S T 78



fig. 184 S T 77

4. 出土遺物

- 土師器皿** 上師器皿にはS T60～S T62をおおう流土より出土したもの（1～3）、遺構検出面より出土したもの（10、16）、及び遺構内より出土したもの（4～9、11～15、17）がある。
- 遺構相互の関係から、古い方より17→16→11～15→10→7～9の編年が考えられる。この内1、4、10は京都、大阪の年代観では15世紀後半に編年されるものである。これより4と伴出した5、6と7～10は15世紀後半、11～17は15世紀中葉～後半と推定される。
- 陶器片** S T64の墓壙底中央より出土した。蓋又は瓶の体部片と思われるが、小片のため種類、年代等は不明である。
- 銭 貨** 銭貨は種類が判別できるものは全て中国北宋銭で、火葬墓より10枚、流土中より3枚出土した。
- S T62より皇宋通宝（初鑄1039年）1枚と銭種不明の2枚、S T63より皇宋通宝、元豐通宝（初鑄1078年）各1枚及び銭種不明の4枚、S T66から大型元宝（初鑄1023年）1枚が検出された。S T63からは6枚が重なり鈎付いた状態で出土している。
- 流土出土のものは皇宋通宝、熙寧元宝（初鑄1068年）、元豐通宝である。
- 小 刀** S T76から出土したもので、茎部は欠失している。現存長26.4cm、幅2.2cmを測る。
- 鉄 釘** 鉄釘は頭部を丁字状に作り、長さ3.5～6.5cmを測る。断面形は方形を呈する。大部分、火を受け小片となっているため、本数を確定できないが、火葬墓1基につき1～26本が出土した。
- S T62より出土したうちの1本には、炭化した丸太材が残存していた。
- 石造遺物** S T62の墓壙北脇部より出土した。平面は方形で21cm×23cm、高さ9cmで小型のものである。四辺に退化した反花が刻まれ、宝篋印塔の1部と思われる。この周囲からはこれ以外に宝篋印塔の部分品は出土しておらず、これがS T62に伴うものかは明らかではない。
- この他、サヌカイト製の打製石錐1、砥石1が流土中から出土している。
- 5.まとめ** 第47地点では前回調査分とあわせて計76基の火葬墓が検出された。先年度の調査では、墓域を構成する小群の存在の有無が明確には把握できなかった。しかし今回の調査で、一定の範囲に3回にわたって営まれた、3～5基の火葬墓群の存在が明らかとなった。
- 墓域の造営期間は、出土遺物から15世紀を中心とするものと考えられる。また墓域はさらに北西へ続く可能性がある。

北神第4地点遺跡

1. 経過

当遺跡は、北神三回地内における弥生時代集落址として分布調査時にマークされていた。しかし、その規模については不明確であった。北神三回地内の遺跡調査の初年度である昭和54年度に小規模な試掘調査が行われ、弥生上器（中期）や鉄鏃などが出土している。その際に丘陵尾根、谷部三か所について遺跡存在の可能性の高いことが予測されたため、約10haが調査範囲とされた。

昭和57年度末に再度全域に10m間隔で幅2mのトレンチを入れ調査をした結果、三か所の尾根のうち最も西に位置するものについては、全く遺構・遺物が出土せず、また地形からも遺跡の存在する可能性が低いことから調査範囲から除外された。その他の部分については、住居址、土器、石器等が出土しており、継続して試掘を実施する必要性が残った。試掘面積は4,000m²におよぶ。

2. 調査概要

調査対象区域である、二つの尾根のうち西側尾根を「I」、東側尾根を「II」とし、各トレンチを00,01,02,…と命名し、それぞれの西斜面を「W」、東斜面を「E」とする。

I地区

I地区は遺構の存在がまばらで、尾根南端で6基程度の住居址状の落ち込みが集中する他は、I-9～I-14で5基の落ち込み、I-15で土器の集中する部分が存在する。また、尾根先端部で弥生時代の石鏃、磨製石斧、奈良時代の土器が各1点出土しているが、遺構に伴うものではない。

II地区

II地区は尾根上の平坦面が広く、遺構が密集する。II-00～II-22までの間に住居址状の落ち込みが約30基、溝状の落ち込みは尾根筋の平坦面から斜面にかかる付近に並んでおり、斜面に存在するものは少ない。溝状の遺構の大部分は斜面に存在しており、おそらく、コの字形の地山整形遺構と推定される。

II-23～II-35までの間、約170mは、遺構・遺物が全く存在しない。平坦部が少なく斜面も急峻であることから居住地として適さなかったと思われる。

尾根が平地に面するII-41～II-51では、平坦面が広く、溝状遺構・住居址状落ち込み、土壠等が存在した。また、II-45Eでは、付近で産出する凝灰質砂岩製の箱式石棺がトレンチ端で確認された。

いずれの遺構も内部精査を実施していないので、遺物の出土量は少ない。しかし、II-9 W、II-14 Wトレンチで袋状鉄斧が出上している。弥生時代における袋状鉄斧は、九州を中心とする地域で出土するものといわれており、調査の進展とともに今後問題になる遺物であろう。

土器類は、大部分が弥生時代に属するもので、I-00～I-15、II-00～II-22の間で出土するものが中期末（第IV様式）に、II-41～51の間で出土するものが後期（第V様式）のものである。

fig. 185 北神
第4地点
遺跡全景
(西から)



3.まとめ

今年度の試掘調査において、遺跡の存在する範囲が明確になり、遺跡の時期等も概略が判明してきた。遺跡の存在する範囲は、二つの尾根にまたがっている。尾根の奥部（I-00～15、II-00～22）には、住居址状の落ち込み約40基溝状遺構約10条があり、それらのほとんどは、弥生時代中期末（第Ⅳ様式）に属すると思われる。また、尾根先端部（II-41～51）では、住居址状落ち込み、溝状遺構、箱式石棺等が存在し、これらはおそらく弥生時代後期（第Ⅴ様式）に属すると思われる。

北神第5、6、7、8地点

第5地点

石材採掘址とされている所で、現在も採掘して運び出されていない石材（約0.3m角で、長さ約1.2m）が一点存在する。石質は、周辺で産出する凝灰質砂岩である。石材を切り取った跡は、深い谷状を呈しており、多量の石材が搬出されたことが想像される。しかし、その時期を直接、間接に表わす遺物は全く検出されていない。

第6地点

古墳状隆起として分布図にマークされているが、石材採掘址であることが判明した。第5地点は谷状に掘り進んでいるが、当地点は斜面を下方から上方に向かって幅広く掘り進んでいる。付近には採掘時に廃棄された石材の小片が散乱、堆積している。わずかになれた地点で古墳時代の須恵器が出土しているが、当採掘址との関連は不明である。

第7、8地点

いずれも古墳状隆起として分布図にマークされているが、試掘調査の結果、自然の隆起であることが判明した。

18. 下宅原遺跡

1. 調査経過 北神戸三田地区内の遺跡は、昭和54年度より発掘調査を実施してきた。これまでに、弥生時代から室町時代に至る多くの遺跡が明らかにされてきた。

当遺跡の調査は、地区外であるが工事用道路に関連するもので、遺跡の存在は、周辺の圃場整備事業に伴い確認されていた。遺跡は、字辻垣内と呼ばれる段丘上と字大前と呼ばれる沖積地にかけて広範囲に存在している。調査面積は辻垣内地区1300m²、大前地区1000m²である。

2. 立地 当遺跡付近は、武庫川本流が三田盆地から流れ出てきて、その支流である長尾川、有野川、有馬川、八多川と合流する地点にあたり、当地域では、三田盆地に次ぐ広範な可耕地を有する。

遺跡は、南から北に派生する丘陵先端の低位段丘上およびその周辺に広がる沖積地に存在する。

fig. 186 位置図



3. 調査概要 当地区は、弥生、古墳、平安、鎌倉時代の遺構が複合して存在する。中でも辻垣内地区 古墳、平安～鎌倉の両時代は、それぞれに幾つかの小時期にわかれれる。

弥生時代 遺構は、さほど顕著ではなく、ピット中に後期の變形土器片が存在した程度である。

古墳時代 庄内式併行期の土壙（S K01）が最も古く、出土遺物には、但馬、丹後系の土器も含まれている。

布留式併行期には二棟の竪穴式住居址（S B01、02）が確認されている。S B01は、4.6m×5.0mの方形で、北西隅を中心とした部分で多量の土器が出土

NO.24

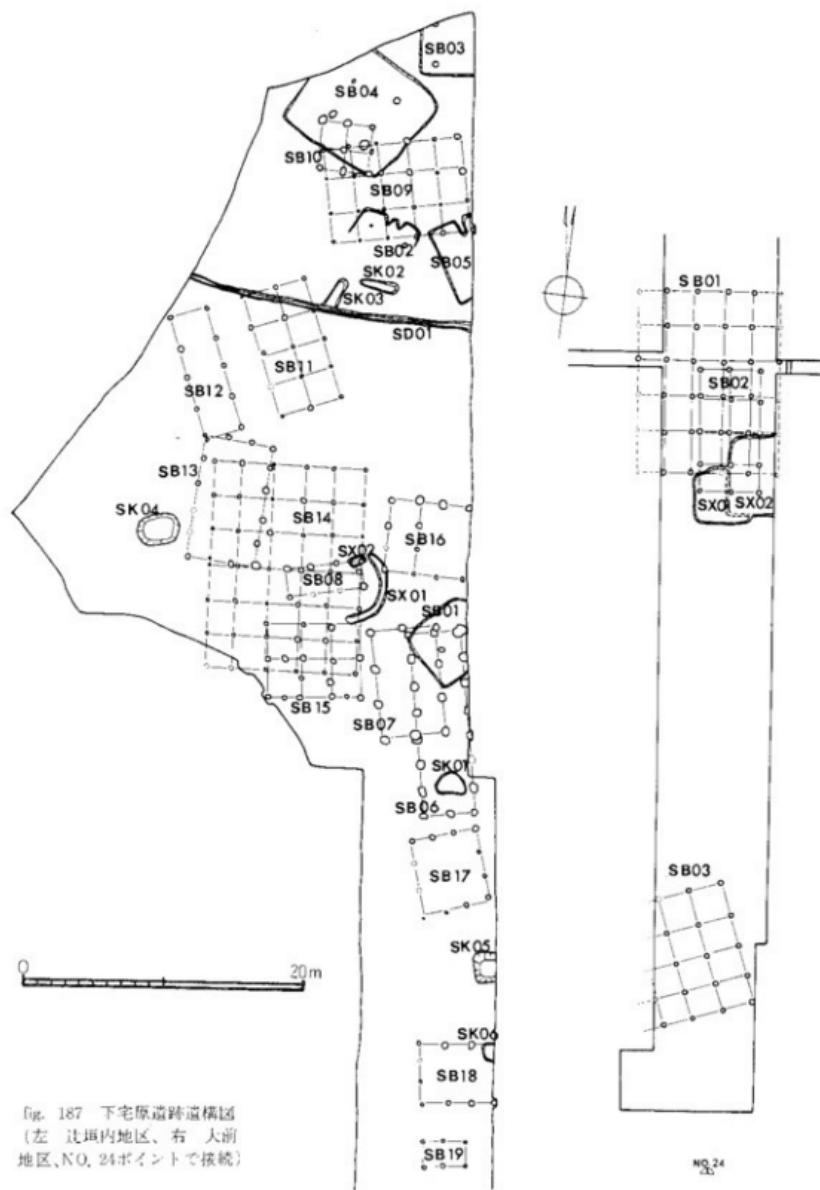


Fig. 187 下宅原遺跡遺構図
 (左：辻垣内地区、右：大前地区、NO. 24ポイントで接続)



fig. 188 辻垣内地区全景（東から）

しており、SK01同様、但馬、丹後系の土器も含まれる。SB02は一辶4.5m程度の方形で、北辶には床面より造り出されたカマドが存在する。

SB03～05は、6世紀中葉を中心とする時期のものである。SB03は、中村浩編年のII型式－2期に属するものであろう。SB04は、一辶6.5m程度のものが二度にわたって拡張あるいは建て替えられた結果、7.8m×8.0mの大型住居址になっている。出土遺物には、アメ状の鉄滓が含まれており、大鍛冶の行なわれたことが推測できる。出土須恵器は、建て替えを裏づけるようにII型式－1～3期と幅を有する。

SB05は、5.9m×3.5m以上で北辶にカマドを有する。カマド入口には側壁を支えるための、内部には張を支えるための石柱が立てられている。出土須恵器は、II型式－3期に属する。

SB06は、7間×2間(13.1m×3.7m)、SB07は、3間×2間(7.7m×4.5m)の掘立柱建物である。住居内からの出土遺物は少なく、時期決定は困難であるが、6世紀末から7世紀初頭と考えられる。SB07の柱穴は、SB06のそれを切っており、SB07が後出することは明らかである。

この他にSK02、03の土壙が存在するが、いずれもSB03～05よりやや古い時期に属する。

平安～鎌倉時代 この時期に属する遺構は、掘立柱建物12棟(SB08～19)土壙3基(SK04～06)、溝一条(SD01)等である。これらのそれぞれの時期を確定することは困難である。ただSB08のみは、10世紀後半に位置づけることができよう。その他の遺構は、12世紀後半から13世紀前半に属すると考え

fig. 189 S B 01
(北から)



fig. 190 S B 02
(南から)

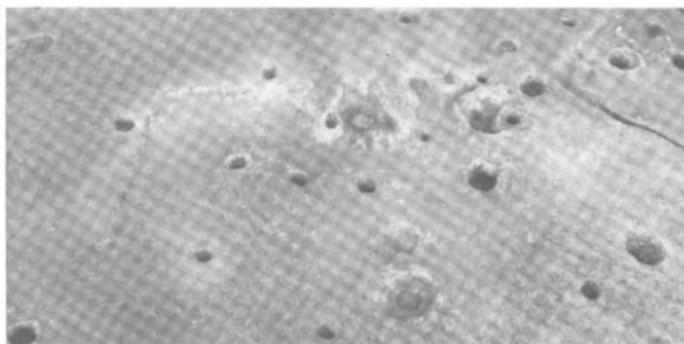
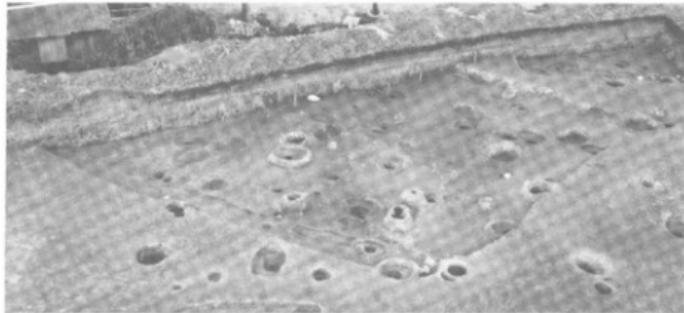


fig. 191
S B 03, 04
(南から)



られるが、遺物は12世紀前半から14世紀までのものが含まれており、同時期に存在した建物址を確定することができない。それぞれの建物址の規模は次のとおりである。

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| S B08 | 3間×1間 (5.4m×1.8m) | S B09 | 5間×3間(9.8m×6.7m) |
| S B10 | 2間×2間 (3.5m×3.5m) | S B11 | 4間×2間(9.0m×4.2m) |
| S B12 | 4間×1間 (9.1m×2.7m) | S B13 | 5間×3間(8.7m×4.9m) |
| S B14 | 6間×5間 (14.7m×10.8m) | | |
| S B15 | 3間×2間 (6.6m×5.3m) | | |
| S B16 | 3間以上×3間 (5.3m以上×4.1m) | | |
| S B17 | 3間×3間 (5.3m×4.1m) | | |
| S B18 | 4間以上×3間 (7.1m以上×4.2m) | | |
| S B19 | 2間×1間 (3.0m×1.8m) | | |

大前地区 当地区で検出された遺構は、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物3棟 (S B01～03)、用途不明の遺構 (S X01、02) などである。

S B01は、5間×5間 (13.0m×10.0m) で、柱根の大部分は抜き取られており、土器片や扁平な河原石で埋められている。抜き取り跡に入れられた遺物は12世紀後半に属するものである。

S B02は、S B01と方位を同じくし重複するもので、4間×2間(8.8m×4.4m)である。S B01と柱穴の切り合いはないが、出土遺物は12世紀末頃のもの

fig. 192
大前地区
S B02

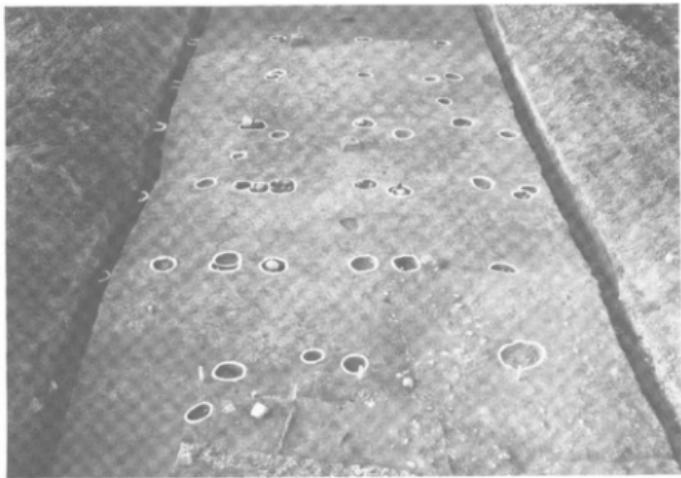


fig. 193
S X01, 02



で、SB01の廃棄後建てられたと考えられる。なお、当建物の柱根も抜き取られたものがあり、SB01同様土器片、河原石で埋められていた。fig. 194-26は、褐釉の壺と思われる。

SB03は、辻垣内地区の段丘下に存在する。旧河道を整地し、建てられている。4間×3間以上(9.0m×6.8m以上)で、SB01, 02と方位を異にする。整地層中には、古墳時代の須恵器が含まれており、それらの一部が辻垣内地区的SB04出土のものと接合する。このことは、平安時代末期頃に段丘を削り、その上で整地をしたことを表わすものである。

SK01, 02は、方形プランで一辺5m前後を有する。深さ0.2m前後で底には、小枝(SX01)、径5~20cmの砾(SX02)を間隙なく敷きつめている。堆積土は、最下層が微砂で、その上部に粘土があり、滯水した状態で使用されたことがわかる。時期は、その出土遺物から12世紀代のものとしかいえない。

4.まとめ 段丘上の辻垣内地区は、開墾による削平で遺構のいたみは著しいが、密度は高く、当地域ではある時期中心となる遺跡であったと考えられる。平安時代末期の掘立柱建物に6間×5間、5間×5間といった大規模なものがあり、「宅原莊」との関連を追求するに値する遺跡といえる。

遺物は、古墳時代前期には、丹後、山陰系の土器が、平安時代末期には、三田市見比窯址の須恵器が存在し、神戸市域でも他の地域とは異なる特性を示している。

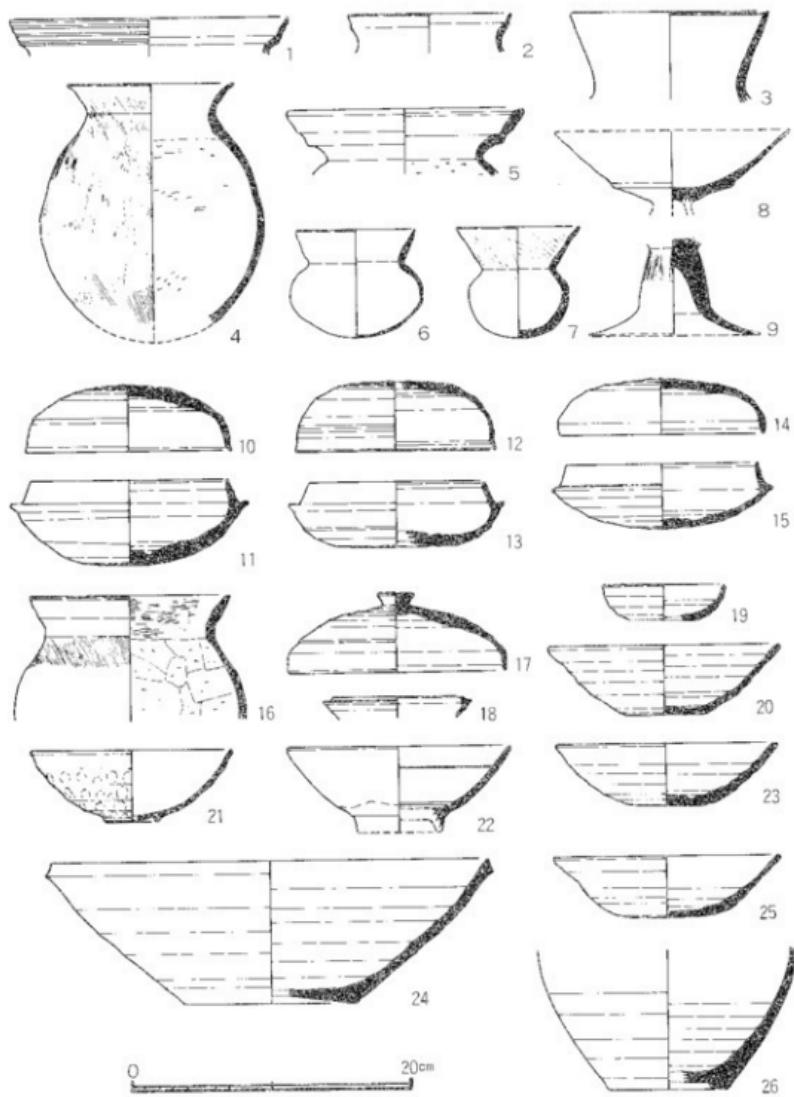


Fig. 194 出土遗物实测图

迁址内地区 SK01 (1~3) SB01 (4~9) SB03 (10,11) SB04 (12~16)
 SB05 (17) SB07 (18) SB08 (19) SB14 (20~22) SK04 (23)
 大前地区 SB01 (24) SB02 (25,26)

19. 塩田遺跡

1. 位置 北区道場町塩田は、六甲山系から北へ流れる有馬川、有野川、八多川と長尾町上津から東へ流れる長尾川が合流する地点の東南に位置し、これらの四河川が形成した東西1.8km、南北2.0kmの盆地に立地している。

2. 歴史的環境 北神地区では、旧石器、縄文時代の遺跡の発見はない。弥生時代中期になると、武庫川右岸の北摂ニュータウン内遺跡や、北神ニュータウン内遺跡等の遺跡が確認されている。また、塩田東方の鎌射山中腹は、磨製石剣出土地として知られている。

古墳時代に入ると鎌射山南麓の中野古墳群、長尾川の左岸の下田中古墳群、北神ニュータウン内北西の日下部古墳群等が存在する。また長尾川右岸には集落址として下宅原遺跡（昭和58年度調査）がある。

これに続く奈良時代の遺跡では生野遺跡や自彊遺跡が存在する。さらに平安鎌倉時代には、生野遺跡、塩田遺跡（昭和57年度調査）、下宅原遺跡等があり塩田地区には条里遺構が残存している。

3. 調査経過 塩田地区は、昭和56年度より圃場整備事業に伴い発掘調査を実施してきた。56年度の試掘調査の結果に基き、57年度は本調査及び、翌年度工事施工範囲内の試掘調査を実施した。57年度調査地は新池の南東山裾の地区で、弥生時代の溝、中世集落址、近世の遺構群が検出された。今年度は、新池の東方山裾部の調査を実施した。

fig. 195 調査区
位置図



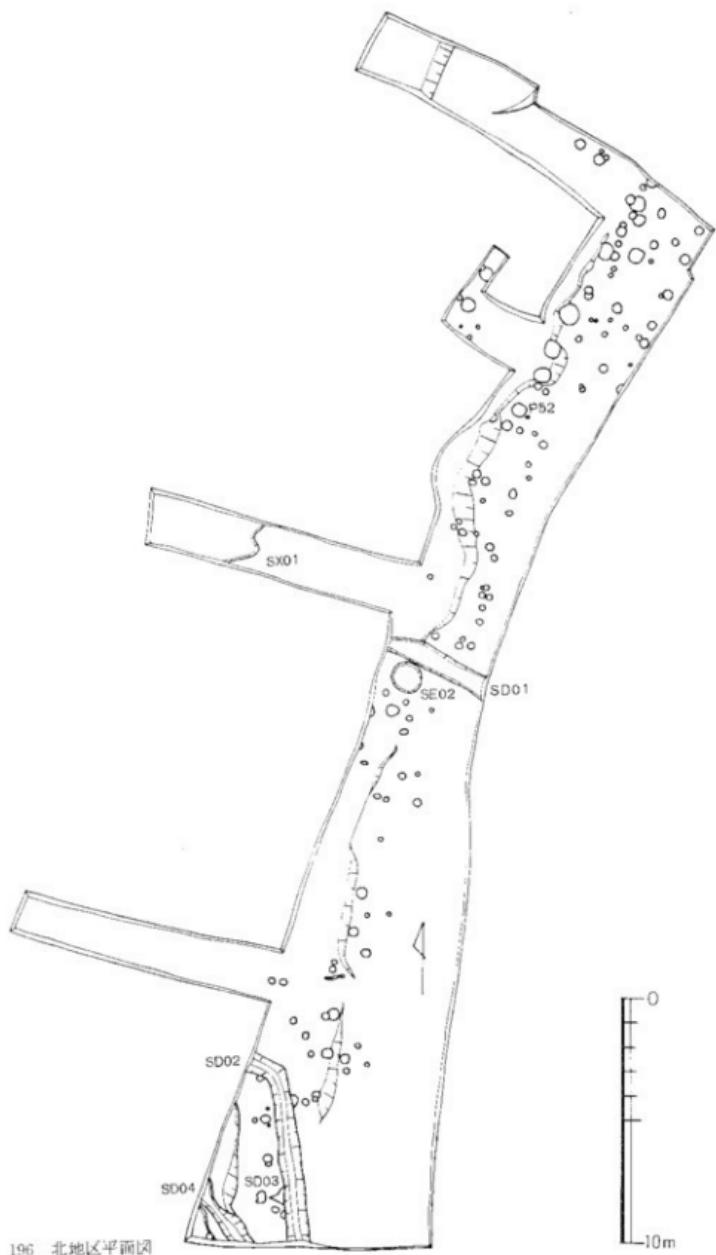


fig. 196 北地区平面图

4. 調査方法 試掘調査の結果、5～9トレンチにまとまった遺構が確認されたため、約450mを発掘調査した。

基本層序と地形 基本層序は、耕土、床土、茶褐色泥砂（包含層）、地山（遺構面）となる。

調査区の地形は、東から西への傾斜地で、標高171～173m前後の小丘陵の張り出し部である。したがって包含層は東から西へ厚くなり、古い時期の遺構は調査区の西端にみられた。また、調査区中央部には南北に走る段があり、段下の一部の遺構は削平を受けている。

検出遺構は、ピット約160か所、井戸2基、溝6条、弥生時代住居址1棟である。また、遺物包含層の上面に一部近世の盛土がある地区や、包含層の下層に古い時期の遺物包含層や遺構のある地区が存在した。

5. 調査概要 北地区

北地区では東北端に柱穴が集中する。径が、①0.5～0.8mと、②0.3～0.4m③0.2mの大きく3種の柱穴が混在する。この3種の掘形内の埋土は、色質とも3種に分けることができ、時期差を示すものと考えられる。大形のものは特に北辺部に集中し、0.2m大の柱穴はほぼ全体に分布するようである。柱穴内の遺物はわずかで、時期決定を行うのは困難である。ただし、柱穴P52より土師器須恵器の小破片と共に輪花紋埴陶器皿が出土しており10世紀代のものと考えられる。

これらの柱穴は、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、建物になるような並び方をするものはなかった。径0.8mの大形の柱穴も同一線上にのるものもあるが、



fig. 197 北地区全景（北から）



fig. 198 北地区、手前は S D02（南から）

建物にはならない。

井戸
(SE02) SE02は、径1.2m、深さ0.2mの浅い井戸である。形状はほぼ正円形を呈する。出土遺物はなかった。

溝
(SD01 SD02 SD03 SD04) 溝は4条検出された。SD01・02・03は、13世紀頃と思われる。SD02は幅0.8m、深さ0.4mのV字状の断面をもつ溝である。SD02内からは、須恵器鉢、壺、輪羽口、鉛錠等がfig. 199 ピット52縄袖陶器出土状況出土している。SD03からは、青磁合子片等が出土している。SD04は、中世遺物包含層の下層から検出された遺構である。溝中から9世紀後半の土師器皿が出土しているが、遺物の出土量は少なかった。6トレンチの西半部にも9世紀代に入るとみられる須恵器壺、壺等が出土する浅い落ち込みがみられた。この遺構も層位的にはSD04と同様に、中世遺物包含層の下層より検出された。

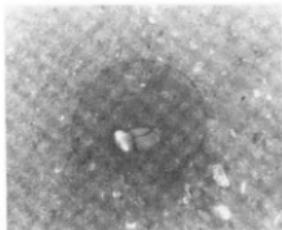
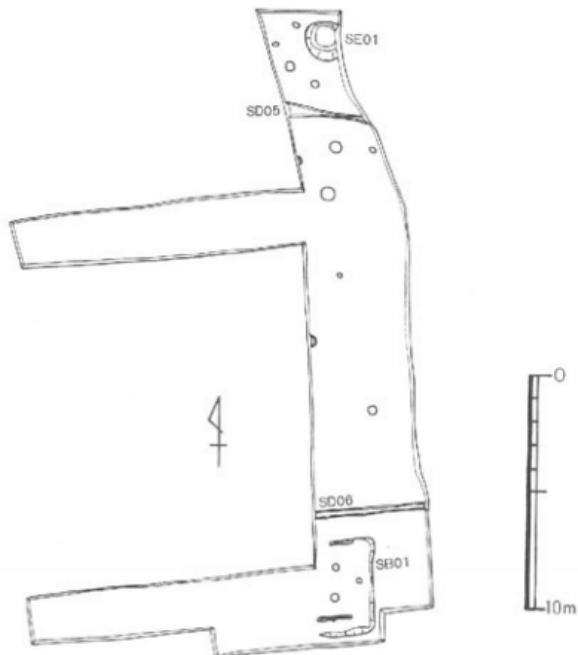


fig. 200 南地区平面図



南地区

南地区は、北地区に比べピットの分布は少なかった。掘形の径 0.6m 余の柱穴が 2 か所みられるが、建物としてのまとまりは示さなかった。

- 井戸** 南区北端では、井戸（S E01）が検出された。（S E01） 径 1.5m、深さ 2.0m の井戸である。土層観察から、径 0.1~0.3m 大の礫が多く投棄され、短時間に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は土師器、須恵器片が少量づつ出土した。鉢の口縁の特徴から、13世紀代に入る井戸と考えられる。

- 溝** S D05・06 は近世の溝である。S D05 は幅 0.2m、深さ 0.1m の溝で、近世陶磁器類が出士している。S D06 は溝底から周囲に砂利をおき、その上に木材を半円形に削抜いたものを上下二枚あわせ、粘土をまいた樋をもつ溝である。溝は幅 0.2m、深さ 0.3m、樋の直径は 0.1m である。

- 住居址** S B01 は、弥生時代後期の方形堅穴式住居址である。西半部分は削平されて消滅しているが、東辺の長さは約 4.0m、深さ 0.2m である。埋土内より弥生土器片が少量出土した。周壁溝は、南辺と北辺に部分的に残っている。支柱穴は 3 か所検出された。東辺中央の床面より壺 2、甕 3 個体が出土している。

この住居址南側には、昨年度の試掘調査結果から、同様の遺構は存在しないものと考えられる。

- 6. まとめ** 塩田地区では、昭和 56 年度に太型蛤刃石斧・サヌカイト片が発見され、昭和 57 年度の調査で弥生時代中期の溝が検出されている。今回弥生時代後期の住居址が発見され、当地域の弥生時代の生活をあとづける重要な資料が得られたことになる。



fig. 201 南地区全景（北から）

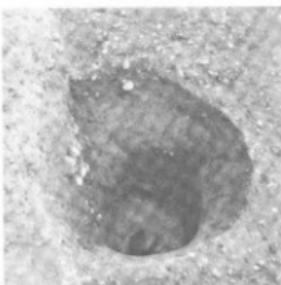


fig. 202 井戸（S E01）

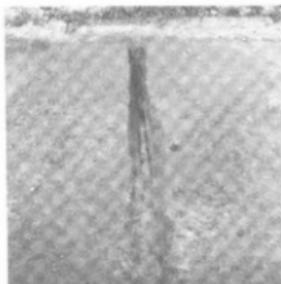


fig. 203 S D06木桶検出状況

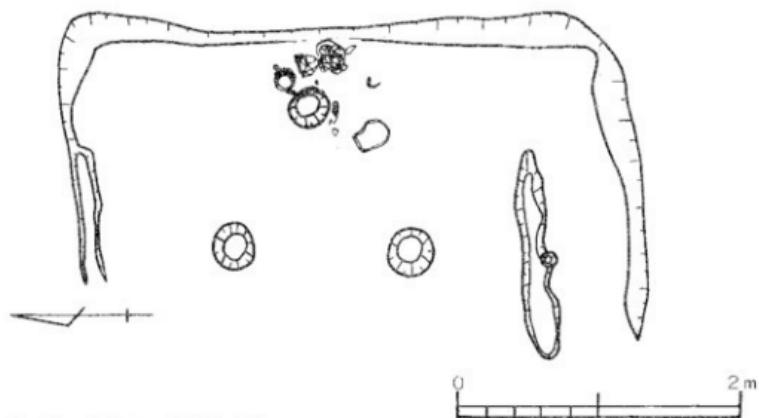


fig. 204 SB01 器出土状況

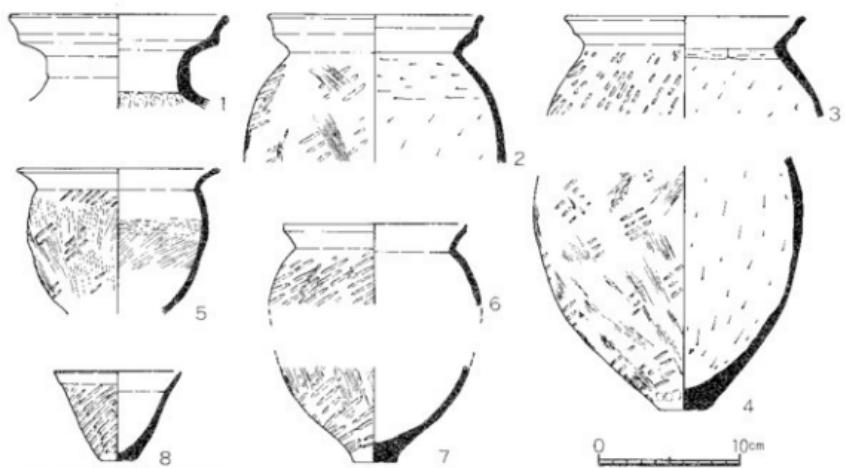


fig. 205 SB01出土遺物



fig. 206 北地区出土遺物(8, ピット52出土)

fig. 207
S B01全景
(西から)



中世の柱穴群は、標高171～173m前後の丘陵斜面地にあり、居館を営む条件を具备している。ここからは有馬川をはさんで1.5km北方に塩田八幡社を望むことができる。

塩田八幡社が権勢門家から田畠を寄進され、保元3年（1158）に石清水八幡社の所管となるに至る経緯は、当遺跡の年代とほぼ符合する。これらのことから、塩田莊が石清水八幡社の莊園として成立し、塩田八幡社を通じて、実際の莊園管理等を行う莊官層の居館として、今回の調査地区的柱穴群はとらえることができる。

出土遺物等では、日常雑器に混じり輪花紋鉢皿や、青白磁合子等の高級品の出土が見られる。また、居館内で小鍛冶を行ったとみられる輪羽口、鉈滓等の出土から、特殊な階層の居館址と判断することが可能と思われる。

平田地区の試掘調査

今回調査を行った平田地区は、有馬川の東岸に位置し、東に山塊のせまる南北に細長い狭小な平野部しかもたない。前年度までの調査地は、有馬川あるいは、東部の山から延びる谷筋部にあたり、遺跡の存在は確認されていなかった。しかし、今回の調査では、多くの試掘場より遺物が出土し、遺跡の存在を窺わ

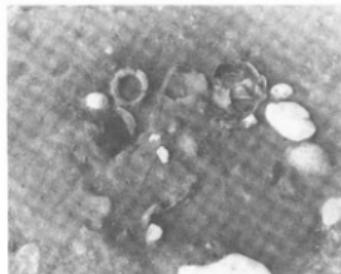


fig. 208 住居址内遺物出土状況

せるものがあった。

試掘は、 2×2 mの試掘場（T.P）を基にし、一部については溝掘（トレチ）を併用して、計37か所を調査した。その結果、8か所で遺構が検出された。

T.P 4 No.4-aで、円形土壙が検出された。土壙は、径1.4m、深さ1.0m以上で、土壙内には人頭大の円碟がつまつておらず、底に木材が敷かれた状態で置かれていた。切り込まれた土層面から推測して、近世以降のものと考えられる。No.4-bでは、南側に下がる溝状遺構かと思われる落込みの肩部が検出され、その落込みの埋土上面には、ピット状遺構がある。

T.P 5 No.5では、不整形の落込みが検出されたが、一部であり形状については不明である。No.5-bは、北側に傾斜する肩部が検出されたが、溝状遺構か自然地形かは判断し難い。

No.10、11、17、22、29では、ピット状遺構及び不整形の土壙状遺構が検出された。このうち、No.22については、近世以降と考えられる。

No.1、2以外の試掘場からは、何らかの遺物が出土しており、その大半は、床土下に遺物を包含する土層が堆積している。しかし、その下部では、黒灰色粘土層の続くものが多く、谷筋にあたるものと思われる。

以上から、No.10、11周辺及びNo.29の部分では、遺跡存在の可能性はあるが、試掘場土層観察からは、微高地と谷部が複雑に入りこんだ地形と考えられ、遺構の存在する範囲を確定し得なかった。出土遺物は、平安時代以降と考えられる須恵器・土師器片が大半であった。



fig. 209 平田地区試掘場設定図



fig. 210 T.P 4 土壙

昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

発 行 神 戸 市 教 育 委 員 会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印 刷 神 戸 オ ー ル 出 版 印 刷 株 式 会 社
神戸市兵庫区新聞地4丁目9番16号

広報印刷物登録・昭和60年度 第287号 A--6類